



▼郭南燕編著『キリシタンが拓いた日本語文学—多言語多文化交流の淵源』977頁・A5判四一四頁・本体六五〇〇円・明石書店

「私の顔を踏むがいい」の系譜

普遍宗教との接触の「足跡」に「日本語文学」の展開を見る

稲賀繁美

一人のために働くよりも、謙虚に人の世話になり、弱くて、もはや人のために役立たずとも、親切で柔和であること……。老いの重荷は神の恩寵。「最上のわざ」と題された詩の一節である(一部、仮名を漢字に改めた)。近年では辻村深月の短編を脚色した平川雄一朗の映画『ツナグ』(2012)に劇中詩として朗読されたのを覚えている若い読者も多いだろう。

ホイウェルス神父(1890-1977)の伝えたこの詩は「伝道の書を下敷きに敷衍したもの(谷口幸代)だが、同神父にはまた『細川ガラシア夫人』(1936)の脚本もある。その薄命の殉教は、早くもクラッセの『日本西教史』(1689)などで欧州に伝わり、18世紀にはドイツ語圏のカトリック神学校で、ラテン語演劇教材として定番に等しい扱いとなっていた(大場はるか氏他の研究)。ホイウェルスによる脚本の背景は、このあたりにも探られようか？そこにはまたゲーテが提唱した「世界文学」への志向も推測される(郭南燕)。それは普遍

性を標榜する宗教が未知の異郷に宣教するなかで遭遇する障書や葛藤として顕現する。「世界文学」は「異文化接触面の言語態」と定義し直すこともできようか。本論文集は、そうした多言語交流の淵源に測鉛を降ろす。

また宣教師たちの日本語学習への熱意の裏には、「順応」accommodatioの必要を力説した巡察師ヴァリニャーノの布教方針が反映している(河村信三)。同師が創設したマカオの聖パウロ学院には、中国人やポルトガル人に日本人も含め、文化的背景を異にする神学生を集めようとの意図が込められていた(李梁)。普遍と特殊との交錯はまた、「通詞」ジョン・ロドリゲスの『日本大文法典』(長崎・1604-8)と『日本小文法典』(マカオ・1620)との振幅にも観察できよう。日本語が語彙・文法両面でラテン語に還元できないことは既に歴然としていた。モリソン、ミルンさらにはメドハースト他の宣教師による辞書編纂事業(陳力衛)は、韓半島では幾度も殉教の歴史とも重なっている(フランクリン・ニウシュ、李容相)。他者への「同化」assimilationか、自己への「適応」adaptationか、自己への「適合」adap-

tionか。この両者の間に位置するのが「順応」策だが、それはマテオ・リッチに至って「典礼論争」を招く。Deuxに「天主」Trianzhuを当てる訳語に難癖をつけた火付け役の一人が、他ならぬロドリゲスだった。翻訳上の正誤は、純然たる神学教義上の妥当性にもまして、政治的覇権に燃着している。カクレキリシタン(の定義にも、今なお教義論争が絶えない(松岡史孝)。信者たちの忠誠心、宗教儀礼上の混淆、土着宗教への擬装に對して正統性認定を左右する教会の権威行使。それら相互の歪な軋轢の裡に「神の啓示」が刷新されると思えば、魔咒に止観に由来し、美女の死体腐乱を追う「九相歌」が、セミナリオで活版印刷に付され(1600)、イクナチウス・テ・ロヨラの「靈操」との親和性を証するカルフトロヌ。その一方、ヴァリニャーノが高く評価した「茶の湯」は旧教のミサとも相性がよく、『日葡辞書』は当時のwarisanoの意味を記録する傍ら、茶道具に関して驚くほど多くの語彙を収録している(アルド・トリニ)。カトリック神父の井上洋治は晩年、抹茶でミサを執り行なった。辺境にあっては、普通もやがて変容を遂げる。上智大学の横手

にある廻町の聖イグナチオ教會もまた、極東における聖性変容の具現だったのか？(エドワード・フェルナンデス、十ステイブ・ヒック)。『キリシタンの世紀』は、1644年に終焉を迎える。その立役者がペドロ・マルケスだが(阿久根豊)、この潜入司祭の幽閉にも関与したのが井上筑後守政重。マーティン・スコセッシ監督の映画『沈黙』(2016)では、イッセー尾形演じる筑後守の「巧み過ぎる英語による」発言が「番理的」——そんな印象を、英語圏でも少なからぬ観客が得たという。その遠藤周作による原作は、谷崎潤一郎『瘋癲老人日記』の自虐趣味に触発された形跡が濃厚だ(井上章一)。世界に伝播した聖画像は、聖性の「再初期化」と複製増殖によって「お洗濯され、靈性の活性化と豊饒(copia)に貢献した(望月みや)。教会colesiaが「道(浦道陽子)ならば、世俗化との闘争(将基面貴臣)のなかで、国境を超えた幾多の宣教師の歩み(北原かな子、崔英修)が残した刻印に目配りしたい。幾多の足に踏まれ、顔の輪郭も失せた踏み絵のキリスト。マリオ・マレファ神父が大分で収集した宗門改めの古文書群(シルヴィオ・ウィーダ、踏みだけたて扁平になった銅板や木版、ぬ反故文書の上に、キリスト教に淵源を持つ『日本語文学』の足跡は、「神の恩寵」の印を顕現させているようだ。

なお本書は人間文化研究機構基幹研究プロジェクトの成果であり、同機構の出版助成を得た、との記載がある。(国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授)